

第一問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① 先日、僕は遅い打ち合わせを銀座で終えて、事務所のある築地へと向かって歩いていた。金曜の夜ということもあって人はかなりでいて、通りには花束を売る露店や、手相を見る辻占いなどもあちこちにでていた。長い信号にひっかかってしまい、なんととはなしにまわりを見ると、この道何十年といった感じの易者^{えいしや}さんが、女性客の手相を熱心に見ていた。そこへ、一人の年配の男性が息^{いき}せき切^きつてあらわれ、「すみません、〇〇ビルは、どこですか」と、かなりあわてた様子で尋ねている。その勢いに負けたのか、易者さんはお客の手を握ったまま、ぬうっと立ち上がり、もう一方の手で指をさして「たぶんあの角を右に曲がった辺りですよ」と答えている。手を取られたままの女性客も、やはり同じ方をさして「たしか、あの角を曲がった四軒目くらいだと思いますよ」と、さらに付け加えている。絵にすると下の図のような具合である。

② 僕は、この光景を見て、とても可笑しくなってしまった。なぜなら、左手で握っているのは悩みを抱えた人の手相であり、易者として、人生をユダ^{ユダ}ね^ねられて^あいる状況である。しかし、右手で「〇〇ビル」をさしているその様子は、人の好い親切なおじさんそのものである。二つの違った立場がひとつに同居していたのだ。



© Masahiko Sato

15

10

5

〔出典〕

佐藤雅彦

「モードが違う」

〔著者出題歴〕

・東京医科歯科大学

・立命館大学

・立正大学

お父さん

第一問

③ この時、僕の頭にある言葉が浮かんできた。モードが違う。この時の「モード」とは、状態とか立場とか訳せばいいだろうか。

④ 易者としての神がかり的な職業モードと、人の好い親切なおじさんとしてのモードはあきらかに別なのだ。でも、道を尋ねた人が、その場にあらわれた瞬間、本人も気づかないうちに親切なおじさんにスイッチングして、別のモードに切り替わってしまった。でも格好は、どこから見ても易者の格好で、しかもお客さんの手を握っている。その奇妙な混在が僕を笑わせたのだ。

⑤ このモードの違う奇妙な混在は、時々日常の中に入り込んでいる。知人に、とても実力のあるアートディレクターがいる。アートディレクターとはポスターなどのデザインを手がける人のことである。彼は忙しい人間だが、やっと、キュウカ^{キュウカ}が取れると、普通のお父さんに戻って家族と遊園地へ出かけたたりもする。これはその遊園地での話である。

⑥ 奥さんとお父さんは、久しぶりのお父さんとの外出にうきうきしていた。遊園地に着いてお昼を食べて、「あなた、ここで写真とって」と奥さんがインスタントカメラを渡した。「いいよ」とにこにこしながらカメラを構えて、ファインダーから奥さんと子供を見た瞬間、彼はAとしてのモードから、急にBのモードに切り替わってしまったのだ。じつとファインダーをのぞき、もつとうしろ、もつと前、いやこの場所はよくない、コウズ^{コウズ}がよくない、服装がよくない、しまいにはモデルがよくないと、とうとう一枚も撮らずにおわったという。僕は、その話を聞いて大笑いしてしまった。普通のAのように、

AD

14

51, 51

○ 職業人としてふるまっていますが、とつきの出来事に対応するときなどに、気づかないうちに自分本来の姿が現れることがある。

× ハ 置かれている立場が切り替わると、生き方やものの捉え方が大きく変わり、その人の生のあり方が一変してしまう。

○ 二人は、その時どきにふさわしいモードを使い分けて生きているが、ときおりそうした使い分けに失敗してしまうこともある。

○ ホ モードの混乱は、傍から見ればユーモラスな光景となる場合も多いが、思いのほか深刻な結果をまねくこともありうる。

現代人が見失ったもの

第二問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① 小さい頃の私は、東京の世田谷に残る武蔵野の残像のなかで遊んでいた。そこには、わずかではあったが、まだ小川があり、雑木林があり、農家や江戸時代からつづく土地の人々の暮らしがあった。しかし、そこには何かが無かった。後に私は、その何かとは、私にとっての「里」であると感じくようになる。

② 現代人は知性でものを考える習慣をもっている。その知性は、いつでも前向きだ。知性は未来へと人々を誘う。まるで未来に無限の可能性があるかのごとく。その可能性の何分の一かを手に入れるべく歩いていけと知性は教える。それにしたがうかぎり、「里」も「田舎」も必要なものとは感じられない。このような意味で、現代人とは、知的な動物である。

③ ところが、知性を媒介としない人間の精神の領域は——私は確かにそれはあると思っているのだが——、たえず帰る場所を探している。それをうまく表現できないから、そのことを私は、魂は帰りがたっている、と表現しておく。

④ もしもそうだとするなら、現代人においては、知性と魂は不調和でありつづける。知性は前に向って歩こうとし、魂はどこかに帰ろうとする。とすると「里」や「田舎」をもたなかった私は、はじめから、魂の帰りがたっている場所をもたないことにはならないか。

⑤ 里を「ソウシツ」した人間。それは魂が帰ろうとする場所をもたない人間である。ところで、「帰る」という言葉は、私たちの社会では、独特の「ヒビき」をもっていたよう

〔出典〕
内山 節
『里の在処』

〔著者経歴〕

- ・北海道大学
- ・山形大学
- ・東京大学
- ・京都大学
- ・島根大学
- ・鹿児島大学
- ・立教大学
- ・南山大学
- ・同志社大学